

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ソラスト船堀保育園
施設所在地	東京都江戸川区船堀3-15-15レガティコーポ船堀1階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

五感で楽しむ季節探し ～散歩カードから広がる身近な自然への探究～

<テーマの設定理由>

園の周りにある豊かな自然に目を向け、子どもたちが日々の散歩の中で、小さな変化や発見に自ら気づく楽しさを味わってほしいと考えた。
図鑑やカードにある情報をただ覚えるだけでなく、実際に草花の匂いを嗅いだり、不思議な形の木の実を見つけたりする「本物との出会い」を大切にしたいという思いがある。見つけたものを自分たちでマップに描いたり、制作の材料として作品に取り入れたりする中で、自然への親しみや「もっと知りたい」という真っ直ぐな好奇心を、

2. 活動スケジュール

年度の始まりに合わせ、園の周りにどんな花や虫がいるかを改めて確かめ、子どもたちが親しみやすい「散歩カード」を準備した。散歩ではこのカードを大切に持ち歩き、見つけたものをみんなで喜んだり、園用携帯で写真を撮ったりすることを毎日の楽しみとして積み重ねた。園に戻ってからは、大きな模造紙の「散歩マップ」にその日の発見を自由に描き込み、みんなで見せ合う時間を設けた。活動が盛り上がるにつれて、図鑑やタブレットで詳しく調べたり、散歩で拾い集めた木の实や落ち葉を制作の材料として活用したりと、子どもたちが自分の作品に自然の彩りを取り入れられるような機会を増やしていった。さらに、日々のドキュメンテーションやクラス前のホワイトボードを通して、子どもたちの発見や驚きを保護者の方へ伝え、園と家庭がいっしょになって子どもの「知りたい」気持ちを支えていけるよう、一年間を通して取り組んだ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

手作り散歩カード: 季節ごとに見られる動植物のイラストや写真を掲載したカード。
散歩マップ (模造紙): 子どもたちの目線に合わせて、いつでも描き込みや振り返りができる壁面に設置。

観察用具: 電子顕微鏡、採集カップ、身近な自然図鑑。

自然物: 散歩で持ち帰った「宝物 (落ち葉、実、枝など)」を制作で使用。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

散歩カードを手に公園へ行き、載っている草花や虫をみんなで探す時間を大切にしました。見つけたときはチェックをするだけでなく、実際に触れたり匂いを嗅いだりして、五感をフルに使って確かめることを楽しんだ。園に戻ってからは、大きな模造紙の「散歩マップ」に発見したものを描き込み、みんなで見せ合う機会を設けた。また、散歩で拾い集めたお気に入りの落ち葉や木の実、小枝などは、日々の制作の材料として自由に取り入れた。図鑑で名前や特徴を調べながら、「これは何に見えるかな?」と想像を膨らませ、自然の形を活かした自分だけの表現を形にしていた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

散歩中、子ども同士で「こっちに赤い実があるよ!」「これ、カードと同じかな?」と教え合い、手を取り合って探索する姿が日常的に見られた。サザンカを見つけた子が「いい匂いがするよ」と伝えると、周りの子どもも集まってきて一緒に香りを楽しむなど、発見がクラス全体に広がっていく温かな関わりがあった。制作の場面では、自然の素材を大切に扱う姿が印象的だった。保育者が「面白い形を見つけたね」「どんな手触りかな?」と一緒に驚き、面白がることで、子どもたちは自分の気づきを自信を持って言葉にし、さらに次の発見を楽しみにするようになっていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

一年間という長い期間、散歩カードをきっかけに四季と向き合う中で、子どもたちの心が季節の小さな変化に敏感に反応し、豊かに動いていく様子を間近に感じることができた。

散歩道にある桜の木一本をとっても、「葉っぱになったね」「今は枝だけだよ」「あ、芽が出てきた!」と、その時々をありのままに受け止め、言葉にする子どもたちの感性に触れるたび、私自身も温かい喜びを感じた。同じ道を歩き続ける中で、いつの間にか散歩カードがなくても「あそこに新しい花が咲いてる!」と自ら気づき、興味を広げていく姿に、本物の探究心が根付いていることを確信した。この真っ直ぐな好奇心を、ぜひ進級してからも大切に持ち続けてほしいと願っている。また、子どもたちと一緒に図鑑を広げたり、実物をじっくり眺めたりする中で、担任である私自身も草花に詳しくなり、共に学び、成長できた実感を強く持っている。次の季節のカードを「まだかな?」と心待ちにしてくれる子どもたちの期待に応えたいという思いが、活動の原動力となった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ソラスト船堀保育園
施設所在地	東京都江戸川区船堀3-15-15レガティコーポ船堀1階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

小さな命と仲良くなろう ～ダンゴムシの飼育を通して育む慈しみの心～

<テーマの設定理由>

散歩先で出会ったダンゴムシに、子どもたちが目を輝かせて夢中になっている姿がきっかけとなった。ただ捕まえるだけでなく、実際に自分たちでお世話をする事で、小さな虫にも「命」があること、そして「生活」があることを肌で感じてほしいと考えた。図鑑で生態を調べたり、電子顕微鏡で体の不思議に触れたりする中で、生き物への興味を深め、命を大切にす優しい気持ちを園全体で育てていくことを目指した。

2. 活動スケジュール

年度の始まり、散歩で見つけたダンゴムシを園に連れ帰り、子どもたちが主体となって飼育環境を整えるところからスタートした。日々の活動では、自分たちで決めたお当番がエサをあげたり、土の湿り気をチェックしたりすることを毎日の楽しみとして積み重ねた。活動が進むにつれて、迷路を歩く姿を観察したり、脱皮した皮を電子顕微鏡でじっくり眺めたりと、肉眼では見えない不思議に触れる機会を増やしていった。待望の赤ちゃんが生まれた際には、命の誕生をみんなで喜び合い、お世話への意欲をさらに深めていった。さらに、日々のドキュメンテーションを通して、子どもたちが発見した驚きや命の尊さを保護者の方へ伝え、園と家庭がいっしょになって子どもたちの優しいまなざしを見守り、支えていけるよう一年間を通して取り組んだ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

飼育ケースと土: ダンゴムシが安心して過ごせるよう、落ち葉や隠れ家のある環境を準備。

観察ツール: 図鑑に加え、体の細部まで見られる電子顕微鏡。

お世話セット: 霧吹きや、給食室からもらってきた野菜の端材。

記録掲示: 子どもたちの「つぶやき」や発見をその場で書き留めるためのメモと壁面スペース。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

図鑑を使って「何を食べるのかな？」とみんなで調べ、給食室へエサをもらいに行くなど、園内の先生たちとも関わりながらお世話が続けた。ダンゴムシの迷路を使って「どっちに曲がるかな？」と実験したり、脱皮した殻を電子顕微鏡で覗いて細かな作りを観察したりすることを大切にしました。赤ちゃんが生まれたときには、その小ささに驚きながら、そっと見守るなど、命を慈しむ具体的な行動へと繋げていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

子ども同士で「お腹空いてるかな？」「あ、赤ちゃんが動いたよ！」と声を掛け合い、命の小さな変化に一喜一憂する姿が日常的に見られた。動かなくなったダンゴムシがいたときには、みんなで悲しみ、命の終わりについても真剣に向き合う関わりがあった。保育者が「どこに行きたいのかな？」「背中の模様が面白いね」と一緒に驚き、面白がることで、子どもたちは自分の気づきを自信を持って言葉にし、さらに生き物への愛着を深めていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

る子どもたちの姿に、深い感銘を受けた一年だった。日々の積み重ねの中で、子どもたちはダンゴムシの一年間の生態を実体験として学ぶことができたと感じている。特に、オスとメスの違いを自分たちで見分けられるようになったことは大きな自信に繋がった。現在、飼育ケースにはオスしかいないことに気づき、「次はメスを捕まえてきて、進級してからもずっと飼いたい！」と目を輝かせて話す姿に、一つの探究が次の学年への期待へと繋がっていく力強さを感じた。長期休み中の水やりやエサやりなど、命を預かる責任の重さを感じる場面もあったが、一年間片時も興味を絶やさずに観察し、慈しむ子どもたちの姿を見守ることができて、本当に取り組んで良かったと確信している。保育者が共に不思議がり、お世話の苦勞も分かち合うことで、子どもたちの「命への確かな手応え」を育むことができたと感じている。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ソラスト船堀保育園
施設所在地	東京都江戸川区船堀3-15-15レガティコーポ船堀1階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

食べて、触れて、いのちを知る ～五感で楽しむ食育と感謝の心～

<テーマの設定理由>

「食事を楽しむ、好きになる」を合図に、子どもたちが食べものに対してもっと身近に、そして深い興味を持ってほしいと考えた。
単に食べるだけでなく、自分たちの手で触れたり、作ったり、時には「いのち」そのものに向き合ったりする体験を大切にしたいという思いがある。乳児期からの積み重ねを年長児の本格的なクッキングや解体ショーへとつなげ、食べものが食卓に届くまでの背景を知ること、感謝していただく心を園全体で育んでいくことを目指した。

2. 活動スケジュール

年度の始まりに、各年齢の発達に合わせた年間の食育計画を立案した。その際、あらかじめ内容をすべて決め込むのではなく、「フリー枠」を設ける工夫をした。**これにより、その時々の子どもの興味関心や、「お箸を上手に使いたい」「かっこいい姿勢で食べたい」といった今の意欲に合わせて、担任と相談しながら柔軟に内容を組み立てられるようにした。

日々の生活の中では、保育者が「今日の給食は何か？」と楽しく語りかけることで、お昼ごはんやおやつへの期待感を膨らませていった。給食室のドアがガラス張りになっている環境を活かし、子どもたちが調理の様子を覗き込んだり、給食職員に「今日のごはんなに？」と親しく尋ねたりする日常の触れ合いを大切にした。

また、玄関のフォトボードの下には、子どもたちが自分で読める「ひらがなの献立表」を掲示。幼児クラスの子が一生懸命に文字を追いついて、「今日はからあげだ！」と喜んだり、親子で「これなんて読むの？」と会話を弾ませたりする、温かな交流の場となった。こうした日々の積み重ねの集大成として、年度の後半に年長児によるカレークッキングを実施し、自分たちで作り上げる達成感へと繋げていった。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

子どもたちの「今」に寄り添う食育計画：年間の計画の中に、あえて内容を固定しない「フリー枠」を設けた。担任と給食職員が密に相談し、「お箸を上手に使いたい」「この野菜を触ってみたい」といった、その時々の子どもの興味や意欲に合わせた食育活動を柔軟に組めるようにした。

調理の様子が見えるガラス張りの給食室：子どもたちの目線の高さで調理の様子が覗ける環境を大切に。「今日のごはんなに？」と給食職員に直接尋ねたり、作っている音や匂いを感じたりすることで、給食への期待感が自然に高まるように工夫した。

親子で楽しめる「ひらがなの献立表」：玄関のフォトボードの下に、幼児クラスの子どもたちが自分で読めるひらがなの献立表を掲示。子どもが一生懸命に文字を読み、保護者の方と「今日はからあげだよ！」と会話を弾ませるなど、降園時の温かな交流の場として整えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

年間計画に設けた「フリー枠」を活かし、その時々の子どもたちの「知りたい」「やってみよう」という気持ちに寄り添った活動を大切にしました。箸の使い方や食事の姿勢など、子どもたちが自ら「かっこよく食べたい」と感じたタイミングで担任と相談しながら内容を設定し、日々の生活の中で楽しく身につけられるよう工夫しました。また、ガラス張りの給食室を覗いて「今日のごはんなあに？」と給食職員に尋ねる日常の触れ合いを軸に、幼児クラスではひらがなの献立表を一生懸命に読んでメニューを確認し合う姿を大切に守った。こうした積み重ねの集大成として、年長児による「自分たちで買い出しから行うカレークッキング」や「いのちを学ぶイワシの解体ショー」を実施し、食への興味を深めていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

玄関の献立表の前では、子どもたちが「き・よ・う・は…からあげだ！」と一文字ずつ指で追いつながら、保護者の方に嬉しそうに報告する姿が毎日のように見られた。給食室の窓越しに「おいしそう匂いがするね」「お肉切ってるよ！」と給食職員に声をかけ、調理の音や匂いを作っている人と共有することで、食事への期待感を膨らませていた。

年長児のカレー作りでは、重い鍋を混ぜる子に「おいしくなれ！」と周りが応援し、順番を譲り合う温かな協力の輪が広がった。保育者や給食職員が「どんな色に変わってきたかな？」「いい匂いがしてきたね」と一緒に驚き、喜び合うことで、子どもたちは自分の気づきを自信を持って言葉にし、食卓に並ぶまでのたくさんの「いのち」や「人の手」への感謝を深めていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

分から進んで、そして真剣に向き合う姿に立ち会えたことが大きな収穫だった。まず、「自分たちの手で作る」という経験が、どれほど子どもたちの意欲を引き出すかを改めて実感した。きのこを割いたり、カレーを作ったりと、自分たちの手が加わった料理はいつも以上にスプーンが進み、誇らしげな表情でおかわりをする姿が非常に印象的だった。刃物を使う活動では、安全への配慮や事前の練習など、保育者としての緊張感もあったが、達成感に満ちた子どもたちの笑顔を見て、挑戦の場を作って本当に良かったと感じている。

また、バイキング形式を取り入れ、自分で食べる量を考えたり、小学生を見据えて給食を取りに行ったりする経験を通じ、「ただ出されたものを食べる」のではなく「自分で考えて選ぶ」という自立の芽生えを確認することができた。

何より、アリの飼育で「命を育てる大切さ」を学んできた子どもたちが、イワシの解体ショーで「命をいただく重み」に触れた際の姿には胸を打たれた。最初は「かわいそう」と戸惑っていた子ども、流通の仕組みや命の繋がりを知る中で、最後には「だから、ちゃんと残さず食べないといけないね」と自分なりの答えを見出していた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ソラスト船堀保育園
施設所在地	東京都江戸川区船堀3-15-15レガティコーポ船堀1階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

地面の下のふしぎな世界～蟻の巣作りを通した小さな社会への探究～

<テーマの設定理由>

クワガタの飼育をきっかけに高まった生き物への興味を、より身近な「アリ」へと広げていきたいと考えた。

観察キットを用いることで、普段は見ることのできない地面の下の「お家作り」を間近に感じ、アリたちの働きぶりや不思議な習性に触れる。昨日と今日の違いを見つけたり、「夜はどうしているのかな?」と想像を膨らませたりする中で、命の営みを身近に感じ、探究する心を育むことを目指した。

2. 活動スケジュール

年度の途中にクワガタが仲間入りし、虫への関心が深まったタイミングで開始した。まずは園の周辺で「大きなアリ、見つけたよ!」とみんなでアリ探しを楽しみ、採集したアリを巣作りが見える透明なゼリーのキットへ移した。日々の活動では、アリが砂を運んで道を広げていく様子を継続して見守り、「昨日の道を止めて、新しい道を作ってるよ」「夜の方がたくさん働いているみたい」と、刻々と変わる巣の様子を分かち合う時間を積み重ねた。折に触れて電子顕微鏡でアリの姿を覗いてみるなど、少しずつ視点を変えながら観察を続けた。さらに、日々のドキュメンテーションやクラス前のホワイトボードを通して、子どもたちの驚きやアリの頑張りを保護者の方へ伝え、園と家庭がいっしょになってアリの小さな世界を温かく見守っていけるよう取り組んだ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

アリの巣観察キット：地面の下の様子が透けて見える、砂が入った透明なケースを準備した。アリが巣を掘り進める道筋や、お部屋ができる過程を横からじっくり観察できる環境を整えた。

採集用のカップ：園の周りにはいるアリを傷つけないように、そっと捕まえてケースへ案内するための小さなカップを用意した。

観察を助ける道具：アリの細かな動きに気づけるよう、折に触れて姿を覗いてみるための電子顕微鏡を準備した。

発見を伝える掲示スペース、ドキュメンテーション：「昨日の道がなくなったよ」

「夜にたくさん掘ったみたい」といった子どもたちの驚きの声を、写真を掲示しみんなで変化を楽しめるようにした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

「アリはどこに住みたいのかな？」とみんなで話し合い、園の近くで見つけたアリをそっとキットの中へ案内した。透明なゼリーの中をアリが一生懸命に掘り進み、迷路のような道を作っていく過程を毎日観察した。

昨日まで作っていた道をあきらめて別の方向に掘り始めたり、静かな夜の時間に活発に動いていたりといった、教科書にはない「生きた発見」を大切にしたい。図鑑と見比べながら、「今は休憩中かな?」「こっちが新しいお部屋だね」と、アリの社会の不思議に胸を躍らせていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

キットを囲んで「今日はここまで道が伸びてるよ!」「昨日の道はなくなっちゃったね」と、友達同士で顔を見合わせて驚く姿が日常的に見られた。夜の間にも巣が大きく変わっていることに気づき、「みんなが寝ている間に頑張ったんだね」と、アリの努力を思いやる優しい関わりがあった。

保育者が「どっちに道を作ると思う?」「あ、昨日と場所が変わったね」と一緒に立ち止まって不思議がることで、子どもたちは自分の気づきを自信を持って言葉にし、身近な足元に広がる未知の世界へさらに興味を広げていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

アリの飼育を通じ、子どもたちの生き物に対する「心の変化」と「鋭い観察力」に驚かされる毎日だった。

一番大きな変化は、以前は散歩先などで無意識にアリを踏んでしまう姿も見られた子どもたちが、飼育を始めてからは「命を大切にする」という意識を強く持つようになったことである。「アリさんもお家を作っているんだね」という実感を積み重ねることで、一匹一匹を愛おしむ優しさが育まれたことは、何よりの喜びであった。

また、飼育の難しさから学んだことも多かった。一度に20~30匹という多くのアリを、弱らせずに捕まえることの難しさに直面したが、子どもたちは手でそっと捕まえる練習をしたり、どうすれば元気に巣を作ってくれるかを真剣に考えていた。その中で、「あまり動かないアリと、いつも動いているアリがいるね」とアリの社会の不思議に気づいたり、「暗いところの方が安心するんじゃない?」と段ボールで囲いを作ったりと、子どもたち自らが「アリにとって心地よい環境」を工夫する姿が見られた。

毎日、古い道をあきらめて新しい道を作り直すアリの「試行錯誤」を、子どもたちと一緒にハラハラしながら見守った経験は、私自身にとっても深い学びとなった。この一年、どんなに小さな生き物にもそれぞれの暮らしがあることを、子どもたちと共に感じ取ることができて、本当に取り組んで良かったと感じている。